

日本細菌学会 関東支部ニュース

第25号

第74回支部総会にご参加をお願いします

きたる10月26日(木)、27日(金)に第74回支部総会を催します。お忙しい事とは存知ますが皆様そろってご参加下さい。活発な討論をお願いします。

細菌学会のように大きな学会では会員の興味や研究対象は多様化しています。小さな学会では参加者は専門的で、詳細で高度な討論が出来ます。しかし、大きな学会では多くの参加者は個々の問題については素人と云う事になります。そこで、ついつい発表者は良い討論を期待せず、聴衆を考えずに一方的に研究内容を述べますし、聴衆はレベルの低い質問をしてはと遠慮してしまうのが現状のようです。これが大きな学会の活動が不活発になる原因のように思われます。

研究は論文が発表されて完成するもので、学会発表は中途的なものです。皆に聞いてもらって、不十分な所を指摘してもらうのが目的なはずで、また、自分で発表しなくても学会に参加し、皆がどんな研究をしているのかを知り、その研究の完成を助けるのが会員の務めだと思います。

この会のお世話をお受け受けたとき目的にしたのは、全会員の研究分野の演題を網羅し、どんな研究が行われているかを知って頂けるようにする事、聞いて頂く事によって今どんな研究が求められているか、自分がどんな貢献ができるのかを考えて頂ける事です。

この目的にそって、広く演題を求めました。そのために二会場になりました。一般演題には、十分に討論時間を取りました。また、発

総会長 新井俊彦
明治薬科大学教授



表者には、講演に加えて、ポスター展示もお願いしましたので、そこでも質問して頂けます。これはまた二会場のために聞けなかった演題を見て頂くためでもあります。

完成した研究発表である特別講演やシンポジウムを止めて、これから研究の余地のある話題提供にしました。原因未解明の疾患は、既に原因は推定されているのですが、細菌学的には証明が不十分でないもので、どこまで判っているか、これから何をしなければならぬかを考えて頂きます。疾患の治療では、最近話題の感染症を取り上げ、治療法開発のための研究を紹介して、基礎研究と治療のつながりを考えて頂く事にしました。

あとは皆様にご参加下さって、討論によって会を盛り上げ、懇親の実を上げて下さるのを期待するのみです。

第73回日本細菌学会関東支部総会を終えて

第73回総会長

国立衛生試験所 部長 三 瀬 勝 利

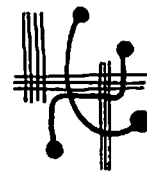
さる6月22、23日、国立予防衛生研究所で行われた第73回日本細菌学会支部総会は盛会のうちに終了いたしました。無事終わることができましたことに責任者として安堵しておりますとともにご協力頂いた方々に心よりお礼申し上げます。出席者総数は、雨天にも関わらず二百数十人を数え、懇親会だけ出席された賢明な方を加えると、三百人に近い方が参加されたこととなります。

シンポジウムは2題行いました。初日の「MRSAとその後の感染症〔座長、橋本 一 部長（北研）、寺脇良郎教授（信大）〕」では5人のシンポジストの方が、二日目の「細菌の病原性と生体防御〔座長、岡村登教授（東医歯大）、渡邊治雄部長（予研）〕」では六人の方が最新の知見を発表されました。フロアからの討論も盛んで、充分な討論時間を取ったつもりでしたが、定刻をオーバーするほどでした。但し、以前から気になっていたことですが、橋本 一先生や吉川昌之介先生などの長老組の元気さに比べて……元気がありません。若手の方々からの討論が少なかったのは残念です。シンポジウムの評判が非常に良かったものですから、菜根出版にお願いし、Proceedingsを来春を目指して刊行することになりました。シンポジストの方々にはご多忙中の所申し訳ないと思っておりますが、来年三月の日本細菌学会総会に間に合うように刊行したいと思います。

ています。我々の恩師であり、日本細菌学会の発展に尽力された中谷林太郎先生の古希の記念になればと思っています。本の題名は「再熱する細菌感染症」を考えていますが、吉川先生の中公新書の名著の亜流の感じがして、迷っています。良い題名があれば教えてください。

一般演題も我々が個別にお願いしないのに18題も集まり、いずれも興味深いものでした。シンポジウムとそれほど変わらない多数の出席者があり、こちらの方も盛会でした。名誉会員の村田良介先生も出席され、熱心に討論に耳を傾けられていたのが印象的でした。本学会のリーダーを務められた方々は、長命でお元気な方々が多いようです。

最後に総会を終えるに当たっていろいろお世話いただいた関東支部評議員の方々、島村忠勝教授（前支部長）、場所を快くおかし戴いた予研の山崎所長、森次副所長、渡邊部長、中村室長、及び細菌部の方々に心よりお礼申し上げます。



フォーラム

「臨床医学研究から」

国立小児医療研究センター感染症研究部
竹田 多恵

医療・医学研究をめぐる状況は今大きな転換期を迎えている。掲示板に折り重なって貼られているポスターには、脳機構、プログラムされた生体システム、その破綻によるガン化機能、それを基盤とした遺伝子治療などが先端課題として輝いている。そんな中に細菌感染症の話題を見つけることはだんだん困難になった。細菌学の分野でも分子生物学やコンピューターの導入は、テクノロジー革命を予感させ、病気の仕組みは快刀乱麻に解決できる期待を持たせてくれた。しかし、トビックス性は低いとしても、細菌学の研究が不用となるとは思っていない。高度な変異手段を持つ細菌は決して楽観を許さない相手であって、ヒトとの攻防は果てしない気がしている。医療の現場では生々しい課題がまだまだ山積している。

まず、迅速診断は最も緊急の課題である。遺伝学的・免疫学的手法の活用は先端的で期待されている。しかし、我々は細菌の生け捕りを止めてしまっただけでは宝物を捨ててしまうことになる。培養技術にも一大革命が欲しい。診断が付いても、的を得た治療法がない疾患も多い。ペロ毒素による重篤な腎不全患児の前で、対症療法しか指示できない無力さはなんとも寂しい。発症機構の解明から一気に予防・治療につながる応用研究への素早い対応も医療の現場から強く要望されている点である。医療研究では疾患の各論が重要である。

最後に、未知の原因を見出すことは研究者として最も胸躍る冥利な課題である。多くの原因不明の疾患の中に細菌が原因ではないかと思わせるものはまだ残っているような気がする。川崎病を初めとする種々の血管炎、リウマチ、自己免疫病、クローン病、種々の神経炎等々。近年、溶血性尿毒症症候群の犯人としてペロ毒素産生性大腸菌が挙げられた経緯などを読むと、そのブレイクスルーは意外なところにあるかも知れないと期待させてくれて楽しくなる。

「わかりやすくなってきた内毒素研究」

自治医科大学微生物学教室
松浦 基博

内毒素 (Endotoxin) の本体はグラム陰性菌の細胞壁構成成分として存在するリポ多糖 (Lipopolysaccharide, LPS) であり、溶菌などに伴って菌体から遊離されると生体に対して多岐多彩な活性を発現する。私がこの分野の研究に入ってきた十数年前には、まだ活性の発現を担う LPS 中の構造も確定しておらず、幅広い活性が単一物質からどの様にして発現されるかについても説明ができていなかった。その後、LPS の活性中心であるリピド A の化学合成が成功し、それまでの研究で問題にされていた微量の爽雑物の影響の論議も回避できるようになった。多彩な活性の発現に関しても、LPS の作用がサイトカインなどの仲介物質の産生を介して広がって行く機構で説明できるようになった。LPS は毒素としての障害的な作用と免疫系の賦活作用の様な有益な作用の両面を発現する。これは LPS 刺激に対して本来は生体防御のために働いているサイトカインなどの防御因子が、LPS 刺激が強すぎる時にはその産生バランスを崩し過剰な反応を引き起こしてしまうためと考えられている。現在、エンドトキシンショックの治療を目差して、抗サイトカイン療法などの研究も盛んに進められている。また、LPS の刺激伝達に関する細胞レベルでの研究も活発に進んでおり、細胞表面の LPS 結合タンパク質も幾つか見出されている。現在の大きな課題は、細胞内へ LPS の刺激を伝える真の LPS レセプターの究明である。この様な研究の発展は、サイトカインや細胞内情報伝達経路などの研究の進展と相まって得られたものである。難解であると思われていた (?) LPS の研究も、他の分野と関連しながら少しずつ噛みほぐされ、わかりやすく説明できるようになってきたと感じている。解明しなければならない問題はまだまだ山積みしているが、わかりやすい研究成果を発信することによって、より多くの人々に関心を持たれ理解されるようにしていきたい。

「混合感染症研究の楽しみとイライラ」

東京歯科大学微生物学講座

奥田 克爾

歯学部で細菌学を専攻する多くの人間は、コッホの条件を満たさない細菌を対象として研究していることにジレンマをもっているように思う。齲蝕および歯周病とも明らかな感染症である。また混合感染であることもその研究が一筋縄では行かないイライラがある。さらに私共が扱ってきた細菌種名は、その分類学的研究などによって名前が変わってきた。混合感染症でどの細菌が鍵となる働きをしてそのどのような病原因子がその疾患に密接に関与するかという私共の関心とは、全く別のイライラでもある。歯周炎の病原菌の1つである *Porphyromonas gingivalis* は、*Bacterium melaninogenicum* と最初命名され *Bacteroides melaninogenicus*, *B. melaninogenicus* subsp. *asaccharolyticus*, *Bacteroides asaccharolyticus* そして1988年まで *Bacteroides gingivalis* であった。私共は、同じ菌種でありながら5つの名前の論文を発表したことになる、また *Actino bacillus actinomycetemcomitans* は、一時期 *Haemophilus* 属だということが、*Ins. J. Syst. Bact* で発表され、我々が投稿した同じASMの雑誌では *Haemophilus actinomycetemcomitans* として発表するよう指示を受けた。ところが元の名前に戻ってしまい私共の論文は文献検索でほとんど無視されてしまう羽目になってしまった。

コッホの条件を満たさないヒト病原性細菌といえ、日和見感染症ということになるが、歯周病原菌は外来性細菌であるという可能性もある。だからこそ遺伝子レベルで伝播経路を明らかにさせる楽しみもある。日和見感染症起因菌に共通するタンパク毒素などは、その生物活性は低いし、また種々の条件によってその産生がコントロールされている。研究対象としては、その複雑さを洞察する楽しみもある。今、歯学部で細菌学を研究する若者がもっと増えてくれないかと願っている。

「獣医学研究から」

農林水産省家畜衛生試験場

生理活性物質研究室 横溝 祐一

コロニー出現まで7週間、必須鉄イオンもトラップできない抗酸菌が私の研究相手のヨーネ菌（パラ結核菌：*Mycobacterium paratuberculosis*）です。この一見善玉そうなバグのしたたか処世術を紹介します。ミルクとともに子牛に飲み込まれたヨーネ菌はバイエル板経由で腸管マクロファージに居を構えます。同じような感染経路をとるサルモネラ菌は即座に爆発的増殖をおこして子牛を葬り去りますが、冷徹なヨーネ菌は大事な扶養者の命を脅かすような野暮な真似はしません。マクロファージの癒にさわらぬ手練手管で菌貯蓄財テクに専念。やがて22m腸管粘膜の上皮下層全域はヨーネ菌満載マクロファージに横溢し、数倍に肥厚した腸管切片の抗酸染色標本は目にも清やかな紅縞バウムクーヘンと化します。数年越しの勝手気ままなヨーネ菌の振る舞いを放任し、無心に牧場の草を食みながら痩せゆくヨーネ病牛をみるにつけ、生体防御機構の不甲斐なさに腹立たしさを覚えます。超巨大類上皮細胞肉芽腫に棲みつくヨーネ菌が、ウシ結核菌のような致命的破壊病巣の形成を控える魂胆は不明ですが、家主を怒らせずに居候を決めこむためには得策なのでしょう。自分に必須の鉄源は宿主細胞の貯蔵鉄蛋白から奪いとり、抑制性T細胞の誘導を仕掛けて迎撃をかわし、酒池肉林三昧に明け暮れるヨーネ菌。財務監査機構の怠慢をよいことに、スポンサーの資産を食いつぶす狡猾なヨーネ菌は、首都検察の網にかかれれば背任横領罪で逮捕ものですが。時として、不用意な言動で周囲からのパッシングの憂き目に会うサルモネラ菌型の小生は、世渡り上手のヨーネ菌にとって恰好の嘲笑材料でしょう。今や、結核・ブルセラ・炭疽の旧御三家を尻目にヨーネ病はウシの法定伝染病発生数ではトップのポストに昇進しています。ウシのヨーネ病の防疫技術確立は我々獣医学研究の責務ですが、現代社会組織を蝕むヨーネ菌型ワルを摘発するための迅速診断法の開発も必要ではと思います。

〔 掲 示 板 〕

「関東支部ニュースについて」

編集委員会

委員長 野田 公俊

今回、事業計画委員会（平松啓一委員長）からの関東支部ニュースに対する要望を積極的に取り入れることにし、いくつかの点で新しい試みを開始いたしました。そのひとつは「掲示板」というコーナーを設けたことです。このコーナーは、会員の皆様に積極的にご利用いただくことを目的とし、細菌学会の活性化に役立つと思われるご意見をどんどん採用し、皆様に討論していただく場を提供したいと考えております。お一人 800 字程度でまとめていただければ幸いです。今回は初回ということで、日本細菌学会関東支部会の学術集会委員会の井上松久委員長、将来計画委員会の内山竹彦委員長、事業計画委員会の平松啓一委員長にそれぞれお願い致しました。さらに、新企画のひとつに「お役に立てますコーナー」というものを設けました。このコーナーは、会員の皆様相互の情報交換の場としてご利用いただけるように工夫いたしました。今回は、新井俊彦先生より、「共焦点顕微鏡とセルソーター」と「微生物・免疫学関連英文論文の校閲」などに関して情報をいただいておりますが、皆様にも情報提供をお願い申し上げます。共同研究のおさそい、求人や大学院生の募集、あるいは他学会の情報など会員にとって有益であると思われる情報を採用して行きたいと思っております。また、従来からの「フォーラム」に関しても、さまざまなご意見が寄せられましたが、編集委員会としては継続して行くことに決定いたしました。なお、「集会案内」は大変好評につき継続が決まりました。今後とも魅力ある支部ニュースにするため編集委員一同努力する所存ですので何卒よろしくお願い申し上げます。

「関東支部学術集会委員会だより」

学術集会委員会

委員長 井上松久

学術集会委員会では、先の関東支部ニュースで述べられた吉川支部長の意見を参考にしているいろいろ検討した。まず、魅力ある支部学会の要因について論議した結果、会員の学問的交流の場である支部会の学会開催について、そろそろ再考する時期にきているとの結論となった。そこで早速、支部総会、支部例会の会長の選出基準について検討を加えることから始めた。その結果、会長選出に当たっては、(1)まず、現時点で活発な研究活動や学問的に独創性を発揮している、(2)研究面でその指導性を充分発揮している、或いは(3)各領域から広く人選すること等々を考慮することを申し合わせた。

これらの意見を、日本細菌学会関東支部各評議委員に連絡し、それぞれから会長適任者 1 名の推薦を依頼した。依頼に際しては、推薦者氏名、被推薦者氏名、簡条書きの推薦理由、数語からなる推薦キーワード等も併せてお願いしたところ、会長候補としての被推薦者 5 名が挙げられた。これを支部評議委員会に報告し、検討をお願いした結果、次年度学会長として千葉大学薬学部沢井哲夫教授、東京女子医科大学内山竹彦教授が推薦された次第である。

その他、学術集会委員会として学会開催に当たっての会員の要望をどのように取り入れ、会長にお願い可能か否かなども論議されている。また、将来計画委員会が他関連学会との共同開催を企画しており、その場合学術集会委員会とも関連してくると思われるので如何なる対応が出来るかなどの問題も継続検討課題となっている。

以上これまでの学術集会委員会の検討内容について簡単に報告いたします。学術集会委員会としては、これらの問題について多くの会員諸氏の忌憚のないご意見を拝聴できることを切に願っている次第です。

「事業計画委員会だより」

事業計画委員会

委員長 平松 啓一

関東支部には4つの小委員会がありますが、吉川昌之介先生が支部長になられて、一番に行なわれたことが、これらの委員会の活動内容の見直しでした。私が所属する事業計画委員会は、とくに、他の関係学会との連携を検討することを、大きな課題とするよう指示されました。この件に関しては、まず感染症関連の他学会と緊密に情報を交換すること、理想的には、将来、「感染症とその病原菌」といった、テーマで、臨床から基礎までをカバーした学会やシンポジウムを他学会と共催することをめざして検討することになりました。この試みは、医学細菌学のフィールドに関しては実り多いものとなりうると考えていますが、細菌学会には、ヒト非病原性の細菌の研究をされている方も多数いらっしゃいます。これらの分野についても、将来他学会との連携を考えていこうと思っています。また、学会どうしの連携といった大がかりな形での交換によらずとも、もっと身近な形での情報交換もできるわけです。というのは、多くの関東支部会員は、いろいろな他の学会の会員でもあるわけです。したがって、これらの会員に他学会でのホットな話題や新概念などのニュースを紹介していただければ、お互いに大変ありがたいわけです。このような、会員どうしの情報交換の場を支部ニュースに作ってもらいたいという希望を事業計画委員会から編集委員会に申し上げました。そうしましたところ、掲示板というコーナーが新設されることになり、さっそく、そのことにつき一文を載せるようにとの要請があり、この文章を書いているところです。このコーナーはサイエンスの話題だけでなく、職の紹介や”売りたいし、買いたい”、フランス核実験阻止運動の呼びかけ、などなど、いろいろな practical な要求を満たしてくれる会員の交流の場として、豊かに育ってほしいと思っています。みなさん、どしどし、御寄稿ください。

「将来計画委員会報告」

「細菌学研究の新しい創造へ向かって」

将来計画委員会

委員長 内山 竹彦

吉川昌之介新支部長のもとに、新しく「将来計画委員会」が設定された。委員は、評議員の中から、池田達夫（帝京大）、内山竹彦（東京女子医大）、佐藤謙一（第一製薬）、水口康雄（千葉衛研）、山本友子（杏林大）の皆さんが選出されました。この委員会の期待されるおもしろい仕事は、他の委員会と連携のみに細菌学会関東支部の活性化を図るべく計画を練るということであります。

「細菌学会の活性化」ほど言い易く行ないにくいことはない、というのが大方のご意見でありましょう。細菌学の隆盛と衰勢は関連学問分野の進歩や社会環境の成熟度と密接に連動して変化してきました。「今日細菌学分野の研究はそう大きな問題では無くなった」という声も聞こえてきます。しかしこの意見は、見方が狭いと断言できます。

遺伝子操作や細胞内シグナル伝達機序など、今日医学と生物学の進歩にはめざましいものがあります。さらに重要なことは、これらの進歩のなかから、新しい概念の誕生も起こりえる状況でもあります。細菌学や感染症の研究分野にも、単なる技術の進歩に終わることなく、多くの新しい概念の誕生、それに伴う新しい物質の発見が起こりえると私は考えます。さらに世界を視野に入れば、細菌感染症に苦しむ人々は数えることができないほどです。世界は日本の細菌学の貢献を持っています。これからの日本細菌学会は、内と外に向かってこれまでとは違ったレベルの創造を始める時に到達したと思えます。

将来計画委員会はこの流れを加速すべく、仕事を開始せねばなりません。皆様のご協力をお願いします。ソーゾーとコーフンが待っています。

集 会 案 内

- 第29回腸炎ビブリオシンポジウム
日 時：平成7年11月9日(木)～10日(金)
場 所：神奈川県立県民ホール 横浜市中区山下町3-1
特別講演：地研における病原ビブリオ研究の流れ，一般演題締切：9月30日(土)
問合せ先：神奈川県衛生研究所細菌病理部臨床血清科
☎ 045-363-1030, FAX: 045-363-1037
- 第16回日本食品微生物学会学術総会
日 時：平成7年12月7日(木)～8日(金)
場 所：けいはんな学研都市・けいはんなプラザ 京都府精華町光台1-7
特別講演：食品微生物学会の歩みと私，一般演題締切：9月20日(水)
問合せ先：国立国際医療センター研究所 竹田美文
☎ 03-5273-6844, FAX: 03-3202-7364
- 第30回緑膿菌感染症研究会
日 時：平成8年2月2日(金)～3日(土)
場 所：福岡明治生命ホール 福岡市博多区中洲5-6-20
特別講演：緑膿菌感染症の現況
緑膿菌に対する抗菌薬の思わぬ作用
一般演題締切：11月30日(木)
問合せ先：九州大学医療技術短期大学部 澤江義郎
☎ 092-641-1151 (内7203), FAX: 092-641-6570
- 第11回日本環境感染学会総会
日 時：平成8年2月16日(金)，17日(土)
場 所：東京プリンスホテル 東京都港区芝公園3-3-1
学術講演：病院構造と院内感染
Multi-Resistant Organisms: A Threat to Hospital Infection Control
一般演題締切：10月28日(土)
問合せ先：琉球大学医学部第一内科 草野展周，小出 道夫
☎ 098-895-3331 (内線2438, 2439)
Fax: 098-895-3086
- 第26回嫌気性菌感染症研究会
日 時：平成8年3月23日(土)
場 所：順天堂大学医学部本郷キャンパス 有山登記念講堂
問合せ先：順天堂大学医学部臨床病理学教室 猪狩 淳(世話人)
☎ 03-3813-3111 (内線3370), Fax: 03-3813-0293
- 第9回臨床微生物迅速診断研究会総会
日 時：平成8年6月15日(土)
場 所：チサンホテル(新大阪) 大阪市淀川区西中島6-2-19
シンポジウム：1. 今日の Empiric Therapy と微生物検査
2. PCR 結果の臨床応用
3. 米国における微生物最新検査事情
問合せ先：大阪大学医学部付属病院・臨床検査部 浅利 誠志
☎ 06-879-6680, FAX: 06-879-6683

お役に立てますコーナー

◎共焦点顕微鏡とセルソーター

私共の大学では昨年3月、長年の希望が叶って、分離用セルソーターと共焦点顕微鏡を設置することができました。1年半かかって操作法をおぼえ、ようやく研究が出来るようになった所です。細胞の形態観察、機能分析に大変役立つものである事を実感しています。

大学の機器ですから、ご自由にお使い下さいとは言えませんが、共同研究を希望する方にはご相談に応じます。

明治薬科大学微生物学教室 新井俊彦

☎：03-3424-8616, Fax: 03-3795-7525

◎微生物・免疫学関連論文の校閲

アメリカ人微生物・免疫学研究者グループ（医学部微生物・免疫学教室、助教授、教授クラス）による微生物・免疫学関連英語論文の校閲を引き受けます。

料金：1,700円/頁+手数料（3,500円/件）

期間：受領後1週間

対象：投稿前の英文論文、総説、Book chapter、レフェリーへの手紙など

*文法、スペル、文意等についての校閲、

*FAXもしくはFedex、UPS等による郵送、

*連絡、取扱及び支払い等は全て日本語、詳細は下記までFAXで氏名、送付先住所、FAX及び電話番号を記してご請求下さい。

Dr. Yoshimasa Yamamoto

University of South Florida College of Medicine,

FAX: 001-1-813-974-4151

（詳しくは明治薬科大学微生物学教室 新井俊彦先生まで。）

☎：03-3424-8616, Fax: 03-3795-7525

◎細菌学関係の図書紹介（野田公俊）

最近大変興味深い図書がいくつか目につきました。その中で数点をご紹介しますと思います。皆様の知識のブラッシュアップにかならずやお役に立てるものと思います。

「食中毒学入門」本田武司著 大阪大学出版会（1,600円）

「細菌の逆襲」吉川昌之介著 中公新書（760円）

「細菌感染の分子医学」渡辺治雄編 羊土社（3,500円）

議 事 録

第1回日本細菌学会関東支部評議委員会
日 時：平成7年1月7日(土), 14時~17時
場 所：東京大学医科学研究所本館2階会議室

出席者：新井俊彦（兼第74回総会長）、池田達夫、伊藤 武、井上松久、伊豫部志津子、内山竹彦、江川 清、大国寿士、奥田克爾、川原一芳、近藤誠一、佐藤謙一、野田公俊、平松啓一、辨野義己、松浦基博、水口康雄、宿前利郎、山本友子、三瀬勝利（第73回総会長）、吉川昌之介（支部長）、長井伸也（幹事）、吉田洋子（幹事）

欠席者：梅本俊夫

1. 吉川支部長の所信表明

細菌学会関東支部の活性化については、ここ数代の支部長、評議員の努力により、長期的に見れば上向きになってきたと思う。今回の評議委員会もこの線を守ってさらに前進させたい。この目的の達成のためには3年間の任期は短い、10年、20年の歴史の中で評価されるようにしたい。そのためには継続性が必要である。具体的には、前評議員会で各委員会によりアンケートがまとめられたので、これに添い、多くの会員の持っている意見に対しては、「やれませんが」ということは捨て、「やりましょう」ということ、すなわち実行することを前提にして進めたい。種々の課題があり困難が予想され、各評議員の皆様にはかなりの負担をかけることになるが、この趣旨にご賛同頂き、どうか協力をお願いしたい。

2. 前議事録（新旧合同評議員会終了後、臨時に開催）の修正

- ① P2↑7 異議なく修正→異議なく了承
- ② P2↑3 水口康夫→水口康雄
- ③ 支部長推薦評議員は7名だったが、1名は都合により辞退願ひ、6名となった。

以上の修正について、了承がなされた。

3. 新評議員会の運営方法について

支部長より以下のような委員会組織と支部長所信に沿った検討課題について提案され、了承された。

編集委員会—基本的には現状の事業を継続する。

学術集会委員会—基本的には現状の事業を継続するが、総会の内容および総会長の選出方法については、検討課題とする。

事業計画委員会—主として関連学会との連携について検討する。

将来計画委員会（旧組織検討委員会）—支部長所信表明の線に沿って、他の委員会から提案された将来計画案について検討し、支部活性化についての総括を行う。すなわち、将来計画案は各委員会での検討の後、他の3委員会の委員長と支部長を含め、将来計画委員会の中で討議、決定する。

4. 委員会などの組織とその構成について

編集委員会：野田公俊（委員長）、新井俊彦、梅本俊夫、川原一芳、松浦基博

学術集会委員会：井上松久（委員長）、伊豫部志津子、奥田克爾、宿前利郎、大国寿士、

事業計画委員会：平松啓一（委員長）、辨野義己、伊藤武、江川 清、近藤誠一

将来計画委員会：内山竹彦（委員長）、池田達夫、水口康雄、佐藤謙一、山本友子

以上について、支部長提案の通り了承された。

5. 総会長選出の手続きについて

通常の手続きに従い、学術集会委員会が総会長候補者を推薦し、最終候補者は次回の評

議委員会で決定することが承認された。また吉川支部長より、専門のちがいや教育・研究機関か企業研究機関かを問わず、学術面でコンセプトのしっかりした人を推薦願いたいとの要望があった。

6. 第73回, 74回総会準備状況について

第3回総会(平成7年6月22, 23日, 国立予防衛生研究所講堂にて開催予定)については三瀬総会長より, 第74回総会(平成7年10月26, 27日こまばエミナースにて開催予定)については新井総会長よりそれぞれ準備状況についての報告があった。

7. 前評議員会からの継続審議事項

① 第73回総会シンポジウムについて

今回は総会長により決定していただくこととし, 中長期的には新評議員会の中の学術集會委員会で検討する。

② 学会事務の変更の件

学会事務および広告代理業務の変更について, 前評議員会報告事項の確認を行った。

③ 学会誌への支部抄録の掲載について

支部抄録が学会誌に掲載されることが望ましいが, 基本的には本部の理事会の決定に委ねる。

8. その他

① 今後の評議員会の予定について

第二回 平成7年5月20日(土)

第三回 平成7年9月9日(土)

第四回 平成7年10月26日(木)

第五回 平成8年1月20日(土)

② 各委員長の前委員長との引継について

各委員長は, 前委員長と書面にて引継を行う。

③ 旅費について

原則として前評議員会の方式を踏襲し, 勤務地から会場までの交通費を支給する。

編集後記

北里研究所

川原 一 芳

101年ぶりの暑さに見舞われた今年の夏もようやく終わり, 虫の音を耳にする季節となった。それと同時に夏の学会シーズンもやっと終了し, ささやかな幸せを味わっている。最近の学会はなぜか夏場に行なわれるものが多い。国際学会については明らかに彼らのバカンスに合わせ, その前後に行なわれているのだからそれなりに合理的である。ところが本来(3週間以上の)大型バカンスをとる習慣のない日本で夏の学会が増えてくると休みを返上して汗を流したらせながら発表準備をするのはめになる。おまけに2年続きの猛暑である。かくして熱帯夜と戦う日本人研究者の頭からは独創的思考が消えてゆく。さて, このような悪循環にもめげず新しい編集委員会になってから2回目の支部ニュースが完成しました。委員会ではこれまでのスタイルは守りながらも会員の皆様の意見を取り入れ, 中身の濃い紙面を作ろうと考えています。これからも皆様のご協力をお願い致します。



日本細菌学会
関東支部ニュース
第25号
(1995.9.30)

発行：日本細菌学会関東支部
〒102 東京都千代田区富士見1-9-20
日本歯科大学微生物学教室内
☎ 03-3261-8311 (内) 330
